

※この記事は 2005 年、後藤が在席した地球環境課において主担として立ち上げた「すいたシニア環境大学」の取組を、博報堂が注目し連続取材して書かれたものです。広くネットに公開されました。

大阪流環境論

環境保護を教えるということ。

今でも、小学校や中学校に「道徳」という授業はあるのだろうか。「環境教育」には、何となく「道徳」の授業から受けるのと同じ空気を感じる。

「道徳」の授業のように「環境」の授業は、人として正しいことを教えると言う点で同じ難しさがある。環境保護を義務に感じたり、押し付けられていると感じた瞬間、人は関心を失うからである。このまま私達が環境のことを何も考えず、今のような生活を続けていたら、自然は破壊され、資源は枯渇し、それは、私達の子孫に大きな犠牲を強いる。環境教育とは、このことに、人がどれだけ想像力を発揮し、イメージできるように育むかと言うことだろう。つまり、環境破壊によって、死んでいく動物や植物の姿にどれだけ思いを馳せられるか。あるいは、環境破壊が自分達の子孫の体にどう影響し、彼らの心にどれだけ傷を負わせるかについてイメージを持てるか、ということである。

想像力は、環境問題を自分事として考えられなかった人の心に切実さを生む。切実さは、また、関心も高める。実際には、世界各地で環境教育は、環境問題を肉体化して教える例が増えている、と聞く。現に、私が取材をしたガラパゴス諸島でも、体で感じる環境教育は実践されていた。見る、聞く、知る、そして、食べる、触る、作る、遊ぶことを通して、知識だけではなく、感じさせ、想像力を養う環境教育の方向に向かっている。

ところで、昔と違って、今、日本の子供達は、様々な情報に囲まれている。また、テレビゲームや、音楽など、日々強い刺激を受けている。そんな彼らに、環境に興味を抱かせ、納得させるように「環境」を教えることは、容易なことではない。日本の子供達に環境が傷むことにはいかに想像力を発揮させられるかは、大きな課題である。環境教育

の現場にある学校の先生方もどう対処していけばよいか、試行錯誤を繰り返しながら、頭を悩ませているのが現状である。

さて、環境教育は、教育の現場だけではなく、日本人全体の問題として考える時期に来ている。また、環境教育は、何をどうやって教えるかということはもちろんのこと、環境を教える人をどう育てていくかということも重要なテーマになっている。頭だけではなく、子供達の心と体に、環境保護の種を植え、着実に芽生えさせていく人材は、そう短期間に育てられるものではない。環境教育が長い時間をかけてはじめて結果が出るものならば、環境を教えていく人材の育成にも長い目で見つめることが必要だ。

そんな折、昨年9月、環境省では、「環境保全の意欲の増進及び環境教育の推進に関する基本的な方針」という多少名前は長いが一つの指針を発表した。そのなかで、環境教育のための人材の育成について触れている。具体的には、教職員だけではなく、地域社会において環境教育を担う地域のリーダーの育成を推進していくことが書かれている。そのための施策として、地域で環境に関する活動を実践しているリーダーと教職員と一緒に環境教育研修を受けられる機会を提供している。「環境教育リーダー」を育てる研修基礎講座が全国各地で開催される。

今、省庁だけではなく、全国のNPOなどの各種団体や地方自治体などで環境教育への様々なチャレンジが行われている。そのなかで、ユニークな手法で環境教育者の育成に取り組んでいるプロジェクトがある。大阪の吹田市。ここでは、独自の方法論で環境を教える人材を育てるという試みに挑戦している。まだ始まってあまり時間は経っていないが、少しずつ成果をあげている。

すでに、日本のいくつかの地域では、吹田市なりのユニークな手法を参考に、新しい試みも始まっていると聞く。そして、吹田市のチャレンジは、環境とは違う大きな問題の解決のヒントも私たちに与えてくれている。

大阪流環境論



大阪・吹田市、万博公園の隣には、吹田市資源リサイクルセンター（愛称・くるくるプラザ）がある。

くるくるプラザに

学生たちが集った。

吹田市のなかで5種類に分別されたゴミのなかで、燃焼ゴミ以外は同じ敷地にある破砕選別工場に送られ、選別され、破砕され、あるものは、リサイクル資源として業者に売却され、あるものは処理業者や処分場に向かい、その他は、埋められ、あるいは、焼却される。また、くるくるプラザでは市内から持ちこまれた布や服を資源として再利用し、再利用の方法を公開している。月に何回か教室を開き、環境にやさしい料理を市民に教えたりしている。

異常気象だと騒がれ始めた猛暑の7月14日。昼の1時を少し回り始めたくらいから、くるくるプラザの5階にある第2講義室に、学生たちが少しずつ集り始めた。肩にリュックを背負った学生、ハンカチで汗を拭き拭き教室に入ってくる学生、始業の1時半になった頃には、26人の学生ほとんど全員が着席していた。素晴らしい出席率である。「すいたシニア環境大学」の学生の平均年齢は文字通り63歳。今期で3期生を迎えているが、平均年齢は、毎年、ほぼ同じであるという。





この日の授業の前半は、吹田市資源リサイクルセンターなどの見学である。学生達は、内部をセンターの人に案内をしてもらう。話を聞くシニア大学生の目は輝き、私語をしている不届きな学生はまずいない。破碎選別工場に運び込まれた缶は、きれいな缶と汚い缶に分別され、きれいな缶のみがリサイクル向けとして業者に売られていく。

また、ガラスやプラスチック

は、細かく砕かれ、リサイクル業者に送られる。学生たちは、そのようなゴミの終着駅での臨場感のある光景を興味深く見つめていた。次に、くるくるプラザでは古くなった洋服をリサイクルし、新しい洋服や帽子を作っている作業を見学する。また、捨てられた自転車の部品を集め、新しい自転車に蘇らす作業工程を見学する。

ここでは、こうしてリサイクルから生まれた自転車や洋服、家具を低価格で市民に提供している。授業の後半は、大阪学院大学の先生から「循環型社会と市民活動」についての講義を受ける。炎天下の屋外と、ボイラーを燃やすごみ焼却工場(北工場)を歩いてきたシニア学生にとって、エアコンの効いた教室は快適だ。つい、うとうとしても不思議はないのだが、講師の話がうまいのか、あるいは、学生の真剣さが上回っていたのか、ここでも居眠りをしている学生は皆無であった。3 時間半の長時間の授業であったが、私語も居眠りもなく、授業は無事に終わった。毎週水曜日、シニア学生はその時間にはスケジュールを何も入れないという。何よりも、授業を最優先している。週1日の大学生活は、一部シニアのライフスタイルになりつつあった。



「すいたシニア環境大学」

というチャレンジ。

2002年11月、すいたシニア環境大学が開校した。吹田市の地球環境課が中心となって始めたプロジェクトは、スタッフの一つの確信から始まった。企業で培った技術や知識を今度は地域のために生かしたいという人達の声が市に寄せられた。一方、ISO14001を取得する企業が増えてきて、地域貢献がその指標になっていた。

そのために、地域と連携して何かをやりたいという企業からの申し出がこの吹田市でも増えていた。また、環境教育を総合学習で取り上げたいが自分たちでは解決できず、何とかして欲しいという教育現場からのラブコールが多かった。立場の違う三つの声を組み合わせれば、何かができるのではないかと。一つの確信から、「すいたシニア環境大学」というチャレンジは始まった。

現在、未だ企業の65歳定年制への移行が遅々として進まない。そのなかで、多くの人は、60歳で企業を定年退職する。退職した当初は、まず、多くの夫婦は国内の温泉を旅行する。人生に一息を入れる。そんな生活を2、3年すると、次第に、こんなことでいいのかと、うずうずした気持ちになる。シニア環境大学に応募する人達の平均年齢がおよそ63歳なのは、

そんな理由からだという。1期生の募集には、市内の55歳以上のシニアから非常にたくさんの応募があった。その期待を裏切らないように、と地球環境課のスタッフは、試行錯誤であったが、1年目の授業のカリキュラムの作成に知恵を絞った。こうして生まれたのが、次の授業カリキュラムである。講師は、地球環境課のスタッフ、大学の

教授、企業に所属する専門家などで、環境保護活動のNPOのスタッフも講師を勤めた。講義内容は、地元の自然を知るフィールドワーク授業や、リサイクルの現状や循環型社会についてなど、多種にわたった。また、学生が自主的にテーマを設定して、発表する機会や、お互いのコミュニケーションを円滑にし、議論できる環境を作るために修学旅行等も実施した。

その結果、メンバーのなかにも知識や理解度の差があり、人によって授業の内容のレベルが高かったり、物足りなかつたりするということはあったが、それでも37名の学生は熱心に受講を続けた。また、学生たちがここまで続けられた理由の一つに、仕事以外で利害関係のない友人ができたという喜びもあったようだ。

当初、地球環境課では、8割の単位を取得しないと卒業できないというルールを作ったが、およそ半数の人が皆勤賞だったという。学生による講義の評価は、単なる講義よりも、屋外に出て工場等を見学するなど、実地での講義の方が高かった。また、グラフよりも、立体を使って説明する方が、イメージも沸き、学生に受け入れられた。

1期生の経験を踏まえ、2年目からの授業は、学生のレベルにあわせ、よりわかりやすく、分野もより関心の高い分野も含め広範囲に設定された。また、卒業した1期生と2期生が、後輩のためのカリキュラム作りにも参加し、授業の講師も勤めている。すいたシニア環境大学は、こうして、今年、3期生を対象にしたカリキュラムが進められている。

〇一期生のプログラム

回	日付・時間	講義内容
1	11/20/02 (水) 13:15-16:00	開校式 オリエンテーション 「環境問題概論」、「魅力あるまちづくり～文化と環境の接点～」
2	11/27/02 (水) 10:00-16:00	「自然を知る1」 (吹田市千里北公園)
3	12/04/02 (水) 10:00-16:00	「自然を知る2」 (大阪市鶴見緑地公園)
4	12/11/02 (水) 10:00-16:30	「企業の環境への取り組み～ゼロエミッション～ (某ビールメーカー)」
5	12/18/02 (水) 13:00-16:00	「廃棄物とリサイクルの現状」
6	01/18/03 (土) 13:30-16:30	第一回シンポジウム 「循環型社会の形成に向けて～新たなる環境教育の試み～」

7	01/24/03 (金) 13:30-16:30	「企業の環境への取り組み～化学物質と安全対策～（某インクメーカー）」
8	01/29/03 (水) 10:00-16:00	「NPO 活動の実際」
9	02/05/03 (水) 13:30-15:00	中学校での授業実習
10	02/21/03 (金) 13:30-10:00(22日)	修学旅行 講義 「企業の社会的責任～某情報機器メーカーの環境への取り組みを事例として～」
11	02/27/03 (木) 14:00-17:00	修了研究発表会
12	04/23/03 (水) 14:00-17:00	「プレゼンテーション技術」
13	05/07/03 (水) 10:00-16:00	「自然を知る3」 (豊中市千里中央公園)
14	05/14/03 (水) 13:00-16:00	「千里山田緑地に残された自然環境」
15	05/28/03 (水) 14:00-16:30	「吹田市の環境行政」
16	06/03/03 (火) 10:00-16:30	「自然を知る4」 (万博記念公園自然文化園)
17	06/18/03 (水) 10:00-16:30	学生自主企画講座1（そら組） 「私たちの水道水はどのようにして送られてくるか」
18	06/25/03 (水) 09:30-17:00	「学生自主企画講座2（まち組） 「吹田の歴史と文化を楽しむ」
19	07/16/03 (水) 10:00-16:00	学生自主企画講座3（みどり組） 「自然を感じ、重要性に気づく」
20	07/23/03 (水) 09:30-16:30	学生自主企画講座4（ちきゅう組） 「温暖化対策と環境に優しいエネルギーの有効活用」
21	07/30/03 (水) 12:00-17:30	学生自主企画講座5（もったいない組） 「壊れたテレビの行方」
22	08/06/02 (水) 13:45-16:45	卒業式



シニア環境大学は、

ほんの序章。

1期生は、地球環境課の想像以上に意欲的にシニア環境大学というプロジェクトに参加してくれた。そして、彼らは、「目的は何や。」「俺らを集めて、結局何をして欲しいんや。」「おまえらの手の上で踊ってやろうやないか。」と言ってくれるくらい学生たちはプロジェクトのスタッフと気持を一つにしてくれた。「そこまでおっしゃっていただけるのなら、実は・・・」と地球環境課のスタッフは、パートナーになってほしいという思いを打ち明けたそうである。

地球環境課のチャレンジは、ただシニアに環境に関して教えることだけではない。プロジェクトの真の目的は、シニアが大学を卒業したあとにある。シニアへの教育は、世の中全体に環境を教育する現場を支える人材を育成するためだ。

具体的には、シニアを環境について世の中に伝え回る「環境(エコ)の語り部」にすることである。市内の小中高等学校の環境の授業の講師としてシニアを派遣する。そのために、シニア環境大学では、学んで終わりではなく、人前に出て話すという実践を想定し、人を惹きつける話し方や、目の配り方なども、アナウンサーを呼んで研修させている。吹田市地球環境課は、今、教育の現場で重要な問題となっている環境保護教育の担い手として市内のシニアに白羽の矢を向けた。

隔世代だから、

できること。

このプロジェクトのリーダーでもあり、発案者の地球環境課の後藤氏は、「環境を保護する気持ちを伝えていくことは、子守唄を伝えていくことに近い」と語る。「今、日本には、子守唄が3、4曲しかない。子守唄は隔世代伝承で、元来、子守唄は、おばあちゃんが孫を抱っこしてあやしている時に歌っているのを、台所で仕事をしているお母さんが自然に耳から聞いて、自分が孫を抱っこする時に自然に口にするものらしい。」と後藤氏は語る。

しかし、日本は、大都市圏を中心に核家族が増えた。その影響で、シニアと子供が接触する機会が減った。子守唄を歌えるお母さんもいなくなった。だから、最近、日本では子守唄を聞かなくなったという。一方で、「自転車や家具や家の修理は、かつては、子供は、忙しい父親ではなく、祖父が修理をしているのを見よう見真似で覚え、伝承されていくものだった。環境保護も子守唄も、隔世代で伝承されていくものだ。」と語ってくれた。

今の子供は、何かが壊れると捨ててしまう。修理しようとしめない。修理ができないというのも、核家族が増え、異世代交流が少なくなってきたからだと後藤氏は語る。まだ地元に虫や動物が住んでいた頃を知っているシニアだからこそ、生き物と共生する素晴らしさも隔世代伝承として伝えることができ、また、環境が変わってしまった理由も自分の体験から語るすることができる。

そして、それは、子供たちのなかに、ごく自然に環境への関心を芽生えさせていく。日本の西で、隔世代コミュニケーションは、今、世界各国が抱えている環境という大きな問題を解決する一つの糸口になっていた。

大阪流環境論



NPO 始まる。

平成 16 年 9 月、すいた環境学習協会（NPO 法人 SELF）が設立された。地球環境課の支援を得て、「すいたシニア環境大学」を卒業した 1 期生と 2 期生が自分達の手で作上げた NPO である。

卒業生のほとんどが、NPO のスタッフとして、地球環境課が考える環境の語り部の役割を担う。そして、市内の小中学校から高校に向けて、総合学習支援授業を始めた。彼らは、新しい体験が始まることに意欲満々だが、授業料はおろか、交通費も、弁当代も出ない。まさに、ボランティアである。しかし、いずれは、企業にも協賛してもらい、語り部として失礼にならない程度の報酬は出したいと市の方では考えているという。

NPO 法人 SELF には、モデルとなっているイギリスの NPO がある。ロンドン郊外にあるその NPO は、ある地域に環境教育のサポーターや教師を送りこんでいる。その費用を支え、資金提供をしているのが何社かの企業だそうである。行政と NPO と企業がそれぞれ、三位一体になって活動する環境教育が吹田市でも可能だと考えている。

それまでは、多くの学校から依頼が来るように、また企業からも協賛したいという声がかかるように、NPO としての実績を作ろうと、プロジェクトのスタッフもシニアの鼻息も荒い。

環境先生が

クラスにやってきた。

11月9日、吹田市の某中学校で NPO 法人 SELF の環境の語り部＝環境先生たちによる授業を見学した。2年生の5つの小グループと、1年生30人を教える。5つのグループには、SELF のスタッフがそれぞれ2,3人担当する。1クラスだけは、一人で受け持っていた。また、1年生は、まだ大学に在学中の3期生が担当した。

この中学校での授業は3回で終了なのだが、今回はその3回目にあたる。「多少慣れたでしょう？」と質問を向けると、幾分緊張した顔で、「まだまだ」という答えが返ってきた。授業で教えるテーマは、学校側が決めた基本カリキュラムに基づき SELF のメンバーがそれぞれに考える。内容も大学で習ったことをベースにして、自分の経験から独自の味付けをしていく。

授業のための準備には、かなりの日数をかける。間違っただけを教えられないのはもちろんだが、どう話せば生徒が関心を持ってくれるか、いろいろと検討が重ねられる。この日の各授業のテーマは、「地球温暖化」、「水の汚染」など。自分の体験を混じえ、とつとつと話す先生。関西ならではの笑いを誘う語り口で学生を引き込む先生。そして、自ら実験をして、目と耳で体験させて環境を教える先生。それぞれの先生が苦労をしながら、なんとか子供たちに環境への意識を芽生えさせようと必死だった。

50分の授業は、あっという間に終わった。ほっとした安堵感の表情を浮かべ、環境先生が教室から出てくる。もちろん、肉体的にも精神的にも疲れているだろう。しかし、どの顔からも爽やかな満足感が伝わってきた。今日一日、どんな思いで過ごされるのか。達成感と反省とで、家庭での話題も多くなりそうだ。

授業で教えた SELF の方達に、その後、授業に対するアンケートをお願いした。みなさんにお許しをいただきこのあと一部を紹介した。





人間ナビと

シニア。

博報堂生活総合研究所では、生活予報 2004 のなかで、2012 年の日本人の欲「ヨリカカリ」を予測している。そして、そのような生活者の欲を支えるために様々な新しい社会構造が生まれることも予測した。そのなかのひとつに、「生活人間ナビ」という新しい社会システムを取り上げている。

時代が進むにつれて、テクノロジーが進化する。しかし、一方で、その進化についてこられない自立難民の人達も生まれる。そこに、テクノロジーと生活者の溝を埋めるシステムが生まれる。それが、「生活人間ナビ」という人達である。今、ナビは、多くの車に装備されるようになったが、「生活人間ナビ」とは、将来、新しいテクノロジーが自分達の生活に何をしてくれ、どんな商品が自分の暮らしにふさわしいかをやさしく解説してくれる役割の人達のことである。

それでは、どのような人が生活人間ナビという役割を担っていくのか。それは、企業や行政に長く勤め、専門的な知識や技術のあるリタイアしたシニアの人達であると本書では予測している。

吹田市地球環境課が種を蒔き、SELF の人達が実現しようと活動している環境教育は、まさに「生活人間ナビ」の先駆けである。生活者を取り巻く環境に関する情報の量はますます増えていこう。そして、さらに高度化、専門化していく。そこには、生活者にわかりやすく環境を語る「生活人間ナビ」が現実のシステムとして求められる。

SELF のメンバーの活動は、まず、隔世代伝承の強みを生かし、学校を活動の場とし、

いずれ、その対象は、一般の市民にも向けられていくだろう。吹田市は、将来を見据え、シニアと環境教育という大きな二つの問題を結びつけることにチャレンジし、環境教育とシニア問題という社会問題を将来への可能性へと見事に転換していた。

団塊シニア時代に

花開く夢。

団塊の世代を 1947-1951 年の人達と捉えると、団塊の世代の最後の人達すべてが、60 歳定年制で定年し、最初に迎える年が 2012 年である。今ではオフィス街にいた団塊世代はその年を境に、自分の家のある地元で大移動する。

リタイアしてからもなお、新しい自己実現の場を求める彼らの将来の受け皿として環境という場を提供したい。シニア環境大学を立ち上げ、SELF という NPO の活動を支援する吹田市地球環境課の狙いはまさにそこにある。

プロジェクトのリーダーの後藤氏は、「団塊の世代は、日本の経済を引っ張り、時代をリードしてきた世代。一方でひどい公害などに悩まされた時代をもの心がついてから見てきた最後の世代だと言える。彼らだからこそ話せる臨場感溢れる環境の話があるはず。」と環境の語り部としての団塊の世代への期待は大きい。

環境教育を世代伝承と位置付け、シニアに担い手を託す吹田市のプロジェクトは、今、少しずつ実を結びつつある。それは、大阪流環境教育論の実践であった。環境だけではなく、福祉や健康など、団塊シニアが生活人間ナビとして活躍する場は多くなるだろう。その時こそ、吹田市の地球環境課のチャレンジは世の中の一つの大きな目標になる。

Copyright 2005 Hakuodo Institute of Life and Living.

All rights reserved